



「NISSHA印刷歴史館」「京都紡績業史」への敬意を印刷史で体现 | 産業遺産のM&A



京都市中京区に本社を置くNISSHA（ニッシャ、旧日本写真印刷、2017年に改称）。同社の本社がある壬生花井町は、平安京が栄えた時代、都の中心に位置していた。平安京の右京、三条と四条の間、朱雀大路に面した地には朱雀院があり、宇多天皇や村上天皇など歴代天皇の退位後の住まいとされていた。同社は本社をその朱雀院跡地に置く。

同社本社敷地正面には規模は大きなものではないが、本館と呼ばれる瀟洒な洋館がある。その本館は現在、NISSHA印刷歴史館として多くの見学者を迎える。印刷業はもちろん様々な会社の社員研修、学校の見学学習などにも使われている。

譲渡を重ねて、日本写真印刷の手に

この印刷歴史館の建物は、もともとは当時の京都における紡績会社の大手、京都綿ネルの本社屋だった。京都綿ネルは1895（明治28）年に創業。3年後の1898年にこの地に工場を建設し、操業した。当時「ノコギリ屋根」の大規模工場群は、京都の街中にあってひときわ存在感を示した。

京都綿ネルは1901年には敷地の北側に隣接していた京都紡績を合併した。当時、京都の紡績会社としては京都紡績、平安紡績、伏見紡績などがあり、京都府下の中小繊維会社を巻き込んで、合併や買収を繰り返していた頃のことだ。

その後、京都綿ネルは1906年に本社事務所（現本館）を建設する。ところが、本社事務所を含めた工場施設は1915年に辻紡績所という同じ京都の紡績会社に譲渡された。第二次大戦中の1943年には一時期ではあるものの島津製作所の所有になったという。

第二次大戦を挟んで1946年、日本写真印刷が設立されている。そして、その2年後の1948年、かつての京都綿ネルの広大な工場敷地と建物を日本写真印刷が買収した。日本写真印刷では、本館を1980年まで30年以上にわたり本社屋として使ってきました。

日本写真印刷時代の工場群

日本写真印刷では1948年の買収後、旧京都綿ネルの工場群を倉庫や生産工場として活用してきた。徐々に老朽化していく工場群。何度も改築や修繕を繰り返していたという。

だが、印刷業はもともと大きく重い印刷機や重量のある洋紙などの在庫を置く堅牢な工場・倉庫が必要だ。その意味では、大型の施設や設備を要する装置産業でもある。京都市街の中心地、観光地の目抜通りで操業を続けるのは、どうしても無理があるだろう。そのため同社では京都府下の他の地域や他県、さらに産業全体の海外進出の機運もあり、海外での設備投資も続けてきた。

すると、レンガ造りのノコギリ屋根工場は十分な補修ができない状態になってきた。同社では取り壊しも含めて本社・工場敷地の再開発の検討に着手した。

印刷歴史館の北側にある旧京都綿ネルのノコギリ屋根工場群

再開発にあたっては、歴史的建造物や調度品も残されているという事情から、大学の研究室も交えて建

造物の調査を実施した。すると、工場群のレンガには大阪窯業が関わっていることがわかった。

大阪窯業とは1888年に大阪・堺に設立され、その後隣接する岸和田市の岸和田煉瓦とともに、大阪煉瓦産業の一大集積地を形成した会社である。工場の並ぶ臨海地域は、「東洋のマン彻スター」とも呼ばれた大阪の中でも屈指の工業地帯となった。

鉄製の梁にはLONDONの刻印があった。輸入鋼材であることを示している。老朽化著しい工場群と本社屋は、当時の建築財と技術の粋、京都紡績産業の底力を結集したものがあらためてわかった。

同社では、これら明治建築の粋を後世に伝えていく必要性を痛感し、2008年に本館を保存改修した。そして2009年、本館を印刷歴史館としてオープンした。

国内外の印刷史を今に伝える歴史館

印刷歴史館を見学してみると、国内外の印刷技術とその成果が集結した史料館であることがよくわかる。

楔形文字で刻まれた実物の粘土板、世界最古の量産印刷物とされる実物の百万塔・無垢淨光陀羅尼経、かつてグーテンベルク博物館に展示され現存する実機はないとされる印刷機と同仕様でつくられたグーテンベルク印刷機（複製）、グーテンベルク印刷機によりラテン語活字で印刷され、現在はヨーロッパを中心に世界で48冊が残っている「42行聖書」のファクシミリ版、中国宋時代の慶歴年間（1040年代）に使われていたとされる木製活字（木活字）の実物、現在のオフセット印刷の原点とされるゼネフェルダー石版印刷機の実機、杉田玄白他訳の『解体新書』の実物、同社が手がけた『原色日本の美術』（小学館）や『国宝』（毎日新聞社）などを印刷したハイデルベルグ活版印刷機の実機などが並ぶ。

現在もノコギリ屋根の工場群はNISSHA本社敷地内の北側にいくつか残されているが、老朽化により崩壊リスクがあったため、半数近くは解体されたという。

印刷歴史館の2階バルコニーから見る限り、レンガ造りのノコギリ屋根工場群は、「そこにある」だけで、事業的な価値はそれほど高くはないようにも思える。だが、そこには旧京都綿ネルと京都の紡績・繊維産業を支えた紡績会社への同社の敬意があるように感じられた。

現在、NISSHA印刷歴史館はニッシャ印刷文化振興財団が建物全体の管理・運営を担っている。2011年には文化庁から国・登録有形文化財の登録認定を受け、今後も長く文化と歴史を象徴した建物として保存され続ける。

文：菱田秀則（ライター）